臣井上五郎兵衛早くも大手の門際に乗りつけ鎖縄をかけ夫れを攀ぢて支にる敵を切り拂ひ早くも身を跳らして城内へ飛び入り近寄る敵を切つて落し城門の門を外したれば小早川勢潮の湧くがごとく城内へ亂れ入る金子傳兵衛家久斯くと見て大いに怒り

金「今此のところを破られてなるべきか若しも我れにあらへ。采配は腰にある鉞へをさめ陣刀真つ甲よざしかざし太波のごとく押し來る上方勢の中へ會釈もなく割つて入り當るを幸はひ切つて

〈切りまくり無二無三に血戰する是れよりて然しもの上方勢ドッと色めき一丁ばかり引き退そく傳兵衛馬を止めて陣刀の血ぶるひなし「ポッ」と一ト息つくところへ後ろより注進〈ト駆け來るものあり傳兵衛振りかへつて

金「注進の次第は何ごとだ

注「然んいらふ搦手より乘り入つたる上方勢を防がんと立ち向かはれたる熊谷四郎右衛門は敵のためよ生捕られ殘兵或ひは

打ち死よ或ひは逃れ今は搦手全たく陷いつていらふ。傳兵衛天を仰ひで嘆息おし前には此の大軍を控へ後ろより上方名代加藤主計頭よ責め立てられては最早のがるゝ道なし今は早や是れまでなり花々しく最期の一戰をなさんと覺悟なしたる金子傳兵衛大音よ

金「ヤア〈上方の奴ばら慥かに聞け我れこそ其の昔し鎌倉右大將頼朝公の幕下よ其の人ありと知られたる下野の國金子の住人金子の十郎久連か二十二代の後胤伊豫の國高尾山の城主金子傳兵衛家久なり運つきて今此のところよ討ち死にあす我れと思はんものは來つて勝負せよト呼はつたり小早川隆景此れを見て

小「ヤア〈誰れかある今名乘りあげたる敵將金子傳兵衛を打ち取るものはおきや進め〈ト下知の下より飯篠久太夫

飯「かしこまりいらふと駈せ向つて名乘りかけ

飯「イデ金子氏一ト餐參る。ト ついてかゝる金子傳兵衛

金「エ、猪口才な。ト大いよ

いかり騎乘りひらき「エイト」と手打ちよ打ちおろす一刀哀れむべし久太夫只だ一ト討ちよ相成り血けムり立つて唐竹割り夫れと見るより三澤平馬 三「おのれ朋友の敵逃しはせじと打つてかゝる金子傳兵衛「何を推參な。ト横よ拂へば車切り其の手練の速やかなること目よも入らざるくらわなれば何れも恐れをなして近よるもの一人もおし折りから松崎三左衛門大音あげ 松「ヤア言ひ甲斐なき味方の人々かな敵將とてヨモ鬼神よはあらざるべしイデ其の儀なら我れ討ち取つて敵味方の眠りをさましくれんト鎗おつ取つて突いてかゝる金子家久大の眼をクワッと見開き 金「ヤア一命を危末よする蠅虫め相手よは不足なれど望みよまかして冥土の道連れさしてくれるトわたり合ひ三四合戰かつたり折りから左り手のかたより闖與左衛門馳せ來り 闖「アイヤ三左衛門色のお助太刀ヤすす浮兎いらへト言ひさま打ちもの投げ捨て金

子傳兵衛よゝッと組みついたり傳兵衛「心得たりト小脇よ與左衛門を〆つけ松崎三左衛門の操り出す鎗先き千段卷きより切りおとす三左衛門「這は殘念なりト鎗の柄なげ捨て飛び込みざまよ組みついたり金子傳兵衛野太刀を捨て 金「爾も冥土の案内させんト兩人を〆めつけたるまゝ傍へなる南の方へすゝみ其のまゝ敵千丈の谷間へ飛び込んだり此の容子を見て上方勢いづれも舌を卷て恐れたり斯かる折から城將吉良播磨守陣頭へあらはれ出で其ッ甲の敵を蹴ちらし二の目の進むを一文字よ突き開き敵味方を餘所よ見て馳せ通る其の風情いかよも人なきところを行くがごとし其の勢ひ猛虎の群羊よ入りたる有りさまなり是れがため上方勢四方八面に崩れ立つ大將小早川吉川きびしく下知をつたへャア爾等是れしきの敵よ追ひ立てらるゝ法やある見苦しい了恥を知るものゝ返せ戻せト勵ましたれば大軍一同大浪の岩よ

あたッて逃すがごとく群がりかゝッて播磨守を十重二十重に疊みかけて追ッ取りかこひ吉良事ともせず四角八面左手右手眞ッ甲横さま十文字蜘蛛手に拂ひ撥く纏に切り立て龍虎の威を震ひ七轉八倒して荒れ廻れば又たもや上方勢たまりかねてムラ〳〵パット落葉の風に散るごとく八方へ崩れ立つ然處へ搦手の城兵清正を防ぐことわたゝず大手をさして逃れ來る吉良播磨守此の体を見て最早や此れまでなりト覺悟をなし大音に　吉ヤア〳〵敵の奴ばら當燒山の城主吉良播磨守利次が生害の有りさまを目て武士たるものゝ心得となし末代までの語り種に成せよト馬より飛び下り手早く鎧を脱ぎ捨てゝ陣刀の中刀を卷き左手の肋へ突きたてる此の体を見て吉川元長の臣山岡豊後　山あまりの魔首傍若無人の擧動イデ其の儀なら我れ討ち取ッてくれんト鎗お取り馳せ來ッて突いてかゝる吉良播磨守深傷ながらも聊さか

怯まず早くも身を捻ッて空を突いた豊後這い仕損じたり慌てゝ引かふとする其の鎗の千段卷きを播磨守引掴み手もとへクイと引いた引かれて豊後鎗をつかんだまゝ俯伏しのめるを播磨守左の足に首筋を力にまかせて踏みつければアナ無惨目玉コンコンと飛出し二言と言わず死したりけり吉良利次其のまゝ腹一文字に掻き切り餘る刀に咽喉を貫ぬき其のまゝ前へ俯伏て相果てたり斯くのごとく大將のこと〻ろ討死に成ひ降參したれば殘る四國勢蜘蛛の子を散らすがごとく八方へ散亂したり爰で主計頭清正い士卒に下知して急ぎ火を消させ人數をまとめる小早川吉川も清正のこと〻ろへ來り勝ち軍さを賀す此れより人馬の息を休むるため當城に一日逗留して偖て此の上い高知へ進發せんと下知をおし此の燒山にい少しの人數をのこしおき主計頭清正小早川吉川の三將軍勢を引きつれ高知の本城さして進まれたり斯く

て十月の下旬土佐の國鏡ケ峯の麓まで來り既に押しのぼらんとするところへ思ひもよらぬ山の頂きより大石を轉ばし落しける

ゆゑ先きへ進んだ小早川吉川の軍卒二三百人忽ち打ち落されたり依て上方勢さてゝ此の山上に敵備へをるかと驚ろくうち銀かに後陣のかた騒がしく大いに崩れ立つゆゑ合点ゆかずと思ふうち麓の左右の森の中より數百挺の鐵砲つゝけ打ちに打ち出だし玉烟りの晴れ間より久武内藏の助吉田備中守秋森樹解由の三將現れ出で大音に

三「ヤア〳〵敵の奴ばら確かに聞け爾等此處に來れるとを疾くより知れるゆゑ今か〳〵と待ちうけたりイデ片端より打ち取りくれんと呼ばゝッたり流石の上方勢呆れ果てて相見えたり此のとき山の頂きより總紅ゐに白く抱稻穂の定紋をあらゝしたる旗數流れ銀抱き稻穂の三方見込猩々緋二段馬連の馬印をおし立て長曾我部彌三郎信親例の目方二十四貫目の鐵の棒を馬の平首におし當て黒毛の土佐駒に打ちまたがり軍卒を從がへ坂を下りに眞ッ平地に押し出だし大音に

長「長曾我部彌三郎信親此れまあり後陣に加藤主計頭ぞのと見うけたり先達て三坂峠にて一騎打ちの砌り恩をうけたる身の上なれば敵對ひすゝ恩を仇にてかへす道理なれども國の大事に替へがたし依ッて此のところにて支えたりイザ〳〵見參〳〵ト呼ばゝりながら眞ッ先きに現れ乘ッ込み來る。

第十四席

（殿下の總軍紀州加田の浦を進發す　福島正則土州甲の浦に一番乘りす）

彌三郎信親上方勢の先手へ會釋もなく割ッて入り當るを幸ひ縱横無盡に叫きたつれば上方勢是れがためにあ谷間へ落ち入り死するもの數知れず吉川勢憎くき信親の所爲かなと鎗ぶすまをつくッて彌三郎に突いてかゝる信親いかッて

信「下郎推參ト只だ

一ト討ちよ微塵となる廣永源左衛門おあしく鎗よて向かひたるよ彌三郎馬足にて數十丈の谷間へ蹴込んだり主計頭清正遙かよ斯くと見て後陣より馬乘り出だし　加ヤア〳〵　珍らしや信親どの淆智計感心いたしいらふなり主計頭此れよより見參〳〵ト呼ッたり彌三郎清正を見ると手早く人數をまとめ山上へ引きあげる上方勢打ち死よ手負ひおびたゝしく一統休息よおよぶ清正斯くて一統よむかひ　清さてゝりしてとなれば容易よ進みがたし暫らく此のところよあつて容子をさぐり臨機應變の計らひいたさん皆〳〵　淆尤ともものお言葉其の儀しかるべしと返答よおよぶ爰で上方勢は對陣して專ぱら敵の動靜をうかゝふ扨て彌三郎山上よ二日陣取りしが殿下秀吉公土州甲の浦より大軍よて乘り込み濱邊の堅めを破り高知の本城へ取り詰められたりとの注進ありしかば斯くと聞いて大いよ

おどろき　彌「然あらば本城の一大事救はずんは能ふまじト幹旗替馬印をのこしおき在陣の体よ發ぱひ密かよ手勢をしたがへ高知の本城をさして引き取りました然るに上方勢は斯くと知らねば空しく淆陣してゐると或る日のこと主計頭清正ット山の絶頂を見るよ信親が旗馬印の近邊に諸鳥飛び歩行くゆる　清扨は彼れ何時の間よか此のところを立ち去つたりと覺にたり其の儀なれば猶豫はならずト小早川吉川へも合をつたへ總軍武者押しにおよぶ扨て又た爭よ泉州堺なる寺院の町旭遊社よ淆陣營をかまへて在す豐臣殿下秀吉公よゝ追々告げきたる諸所の注進を聞てしめし長曾我部彌三郎信親の働らきを淆感心ある此のとき淆前に伺候してをる諸將の内片桐東市正且之すゝみ出で　片「恐れながら吾儕存ずるよ彼れ彌三郎の右やう相働らき申するといふゝ是れ地の理よ委しきより自由よ相戰かふことも出來一つよゝ又

た影武者を用ひ斯くお味方を擬るものと察し候らふと未だ言葉の終らぬうち福島正則すゝみ出で「シタが斯く追ひ〳〵三ケ國へお味方責め入り伊勝利のうへハ安閑と此のところよ見合せたるハんこと如何よ候らふなり兵ハ瞬速を尊とぶと申し候らへば片時も早く伊渡海あらせられて然るべし且つまた兼て伊願ひ申し上げ候らふ通り吾儕へ先鋒のお役目仰せつけられ候やう願ひたてまつる殿下聞てしめされ　秀正閣の一言殊勝らし然ら〻早〳〵發向の用意におよび〻ん斯く仰せわッて夫れにつきお手くぱり嚴重よ定めたまひ紀州加田浦へ伊進發あらせられ彌〳〵伊出船ハ十月十三日と定めたまふ扨て其の當日と相成れば第一番が福島左衛門太夫正則軍船よハ源氏車の紋ついたる旗銀の〳〵戻り芭蕉よ猩々緋馬連の馬印を押し立ッたり第二番ハ片桐東市正目元白地よ芭蕉の紋ついたる旗金重籠の馬印をおし立てたり第三番ハ脇坂中務大輔安治朽葉色に輪ちがひの紋ついたる旗金論ちかひよ金切ッ割きの馬印を押し立ッたり第四番ハ加藤左馬の助嘉明白地よ金をもッて蛇の目をつけたる旗に金の蛇の目よ猩々緋二段馬連の馬印をおし立ッたり第五番ハ有馬中務太輔則頼紺地よ白く三つ巴を染めいだしたる旗金の釘貫よ銀馬連の馬印をおし立ッたり第六番ハ平野遠江守長康惣紅ゑよ白く九のうちよ三つ鱗を染め出だし旗金丸の内よハ三つ鱗猩々緋二段馬連の馬印をなし立つたり第七番は糟谷内膳正知正柿色よ白く九曜の星の紋ついたる旗金の唐冠に銀の馬連の馬印を押し立つたり第八番は殿下の伊座船業き縮緬よ白く五七の桐の紋を染め抜いたる幕を霞のごとく打ち廻し猩々緋よ金糸をもつて五七の桐定紋の伊旗赤地よ金をもつて南無妙法蓮華經の七字の刻題目の伊旗は妙滿寺日養上人の裏筆なり且つまた金の千成り瓢簞よは猩

々緋二段馬連の馬印また青黄赤白黒の五色綾の大吹貫き金の切つ割き五十本おし立つたり御旗本の勇士よは赤星内膳正明石掃部之介戸田民部少輔堀田圖書之助名島式部少輔速水甲斐守等をはじめとして一騎當千万夫不當の猛かためたり船頭水手よは皆あ白地よ物摸様の桐を染めたる服を着し此の船頭水手等は殿下の御船よて船歌を謠ふたり　船「ヤアラ新玉の雪毛よごしの着せ長も小櫻おぞしと成りよけり其の色は紅葉にまがふ錦波いづれも軍さは勝ち色の冬は雪毛の空晴れて兜の星も物の座も花やかよとそ見ればけり思ふ敵よ打ち勝つて名をば雲井よ揚げ巻きの太刀は箙弓は袋を出ださずして戸ざゝぬ浮代とそ目出度けれ緑り若松枝も榮えて葉も茂るト調子よく船歌を謠つて走り出す九番は大谷刑部少輔吉隆白地よ褐色をもつて上り三階松の紋を染め出だしたる旗銀の裏菊よ金の切つ割きついたる馬印十番は生

駒雅楽頭親正紺地よ白く割源氏車の紋ついたる旗銀の灯燈よ金の馬連の馬印十一番は日根野備中守高吉白地よ黒く丸よ抱き笹荷の紋の旗金の木魚に猩々緋馬連の馬印十二番は淵野の但馬守長康花色よ白く山道を染めぬいたる旗銀の花籠よ猩々緋二段馬連の馬印をおし立て十三番は田中兵部少輔吉政淡黄地に白く蟠龍を染めぬいたる旗金の蟠龍よ銀馬連の馬印をおし立つたり十四番は中村式部少輔一氏水色に白く横木瓜の旗金の鶏頭よ猩々緋二段馬連の馬印十五番は淺野彈正大弼長政白地よ黒く丸の内よ連ひ鷹の羽の紋の旗金の丸よ三つ引の馬印をおし立つたり折節快晴よて海上浪しづかよして家〳〵の旗馬印日光よかゞやきわたり海中ようつる有りさまは都よ名高き嵐山の風情下を流るゝ桂川にうつりしも斯くやあらんと疑がはる時は天正の十四年酉の十月十八日土州甲の浦の一里手前なる完唯の沖よ軍船をとゝ

め此のところよおいて篤と敵の容子を見んと碇をおろし中よも殿下秀吉公は船樓にのぼりたまひ遠目鏡にて敵の有りさまを覽よ相成ると甲の浦よは柵を二重よ振り逆茂木をかまへ柿色よ白く抱き稻穂の定紋を染めぬいたる旗數本おし立て銀の抱き稻穂に猩々緋馬連の馬印をかし立て鐵砲二重三重に組みあはせ矢とりを揃へ弓よは鼻あぶらを引き鎗長刀は林のごとく兜の鍬をかたふけ鎧の袖をゆり合せ控にたり此のところを守るは一門のうち長曾我部播部頭元勝おおとく主水亮盛秀同右衛門太夫康親一万人陣列堅固よかまへ家〳〵の旗馬印を風よひるがへし鎗長刀は白日に輝やきわたり夜は數万の篝火を焚かせ時〳〵刻〳〵よ怠りあく見廻ることなれば如何なる軍兵彈勢たりとも斯く嚴重よ堅めたれば夜討ち朝掛がけの手段も盡きて見にたりける殿下篤とゆ覽あつて思ひしよりも敵重からとて諸將〳〵をゆ座船に

へ召さるゝ諸將おひ〳〵來る遠目鏡にて敵の容子を見よト仰せあり依て福島正則第一番よ見る諸將代る〳〵見て是れはットおどろく殿下諸將よ向ひ殿「斯く堅固よ搆へいらふ上は容易に進みがたし敵は陸味方は海上ゆえ七分の弱みあり依つて暫らく是れよあつて乘り込むべき圖を見定めることと肝要なり諸將言葉をそろへて「ゆ尤ともの儀よぞんじ奉まつるとヤし上げた此のとき福島正則座をすゝめて福「恐れながら這は君の御上意とも覽えすいらふ何ぞ此れしきの小敵恐るゝよ足らん乘て言上いたせし通り吾儕が武勇をもつて四國の奴ばらの眠りをさまずは此のときなり是非お乘り込みは明日と遊ばされべし今日は時うつりいらふあひだ勿論吾儕先手を相勤め命を的よ働らき能度本望を遂げヤさん殿「イヤ〳〵爾がヤすすでとく然やう輕〳〵しくは破りがたし福「是れはまた君にも似合ひたまはざるお心よわきこと

を曰まふものかな餘人は知らず斯くやす正則は乾と一番乘つかまつり濱邊の敵を退ぞけて君の賢覽よそなへやすべし万一其の儀ならば再たびお目通りつかまつるまと殿下聞しめされ　殿「正則方がやしでう勇ましく然らば明日早天よ攻めかゝるべし一統其の用意よ及ぶべし福島を始め諸將かしこまり奉まつると御受けやし上げ此れより各自己れが軍船へ立ち歸り其の用意におよびまする中にも福島ゝ己れの船へ立ち歸ると屈竟の郎等可兒才藏柱市兵衛大橋茂右衛門福島六兵衛吉村又右衛門星野大崎なんぞいへる輩を呼び出だし　福「さて爾等のうちよて水練を心得たるものあらば申し聞すべし明日の一戰ゝ古今の晴れよて乾と乘り込み敵を追ひ退ぞけんと我等より言上よおよびしとゆゑ是非敵を破らずんば殿下よ再たび謁することと相成らず何うぢや水練を心得てをるものゝ無きや何れも言葉をそろへ一同我々

少々づゝゝ心得てをりまする正則大いよよろこび　福「然らば斯やう〳〵よいたすべしと謀りごとを示し扨て翌十九日拂曉七ツ時より支度よおよび第一番よ福島が軍船すゝみ楯の板竹策をならべ數十艘エイ〳〵聲をあげ漕ぎつける上方勢次第を正して進みける四國勢ゝ乘て期したることとなれば部まりかへッて充分敵を引つけ夫れッと下知しければ筒先きをそろへ一時よ打ち出だす其の音恰かも百千の雷の頭上へ落ちるがごとく射いだす矢さきゝ條つく雨のごとくよ放しかけたることゆゑ白波變じて忽ち闇夜のごとく海中も殆んど涌きかへるばかり依て先陣よすゝみし軍船見る〳〵うちよ五艘ばかり打ち碎かれ　舟「ゝブク〳〵と沈み士卒ゝ海底へ落ち入り其の他の船とても矢玉よあたッて相果るもの數百人此のとき四國方の大將長曾我部掃部の助元勝時分ゝ宜しと合圖の狼煙をッドゥーンと空中に打ちあげる其の

火の光り天よりたなびくよと見る間よ漕ぎよつなぎし兵船百艘餘拍子たッて「エイサアエイサア。」左右より漕ぎ出だし上方の軍船をグル〳〵とおッ取り圍み火矢を飛ばし松明を投げかけ攻めよすれば上方の軍船たちまち數十艘もにわかる烟りよ咽びて海中よおちいり或ひハ燒ところさるゝもの數知れず殿下はるかに此の体を俯瞰あッて扨てハ味方の先手軍船をやかれ難澁の容子と相見たりアレ助けよトお下知ありければ軍使かしこまッて早船よ飛び乘り諸將の船へ通達す諸將かしこまッて助けんと思へども黒烟り海上に黒雲のごとく充滿して敵味方の黒白しかと分らず救ひかねて見えたり然るよ敵方よおいてハ此のとき長曾我部主水亮盛秀樯よのぼり旗をゆり動かして下知あせば波上よなれたる四國勢進退自由飛鳥のごとく攻め戰かふ二陣片桐が先手の船も多く燒れたり大將片桐東市正敏の容子をうかゝひ殿下の十

川重兵衛山川帶刀其のほか十人ばかり呼び出だし　片桐等水練の達にあるものなれば斯やう〳〵よして味方の難儀を救ふべし臣下にハ何れもかしこまッて長曾我部盛秀が元船を目がけ漕ぎよせながら大音よ　思いがよ四國方船手の者ども能く〳〵承たまれや斯く言ふ我〳〵ハ上方の一將片桐東市正且元が郎等なり爾等飛び道具をもッて火責めを事とするハ卑怯千万なり誠ぞの武士のせざるところなりイデ上方武士の手練のほどを見せくれんト軍船漕きつける長曾我部盛秀此れを見て盛アレこそ上方よ智勇兼備と聞こし片桐東市正且元あり必死の風勢なれば近づいては面倒なり鐵砲よて打ち据えよト下知の下より「必得いらふト打ち出だす然れども片桐の船は厚板をもつてつくりし上よ玉除けなしたれば打ちかくる玉は徒勞となり海中へ落ちて水烟りを揚ぐるのみ遣は無益ト上を打てば竹束楯の板よて防ぎある

ゆゑ玉は効〳〵もつて容易よは通らず然るよ長曾我部盛秀が元船の士卒俄かよ騒き出し　卒「ヤア大變〳〵船底から水が入るゾレ水を掻い出せ沈む〳〵ト上を下へと混雜する片桐市正遙かよ此れを見て　片「スワヤ計略圖よあたれりゾレ鐵砲を打ち出だせト下知したれば鐵砲組の足輕五百人筒先きそろへて十匁玉を打ち出だし込め替へ〳〵　打ちながら漕ぎつける長曾我部盛秀大いよおどろき士卒よ下知して鐵砲を防がんとすれば水溢れ入り水を防がんとすれば鐵砲飛び來るゆゑ彌〳〵騒動をなし上を下へと混雜す然處へ片桐船を乘りつけ鍵縄よて引き寄せ鎗先きそろへて突き立つたり此のとき水中より太刀を喞へたる勇士十人ばかり現はれるよと見れしが盛秀が船へヒラリ〳〵と飛びあがり大音よ上方の勇將東市正且元が臣十川重兵衛山川帶刀此れよあり ト呼はり〳〵　切つて廻る中よも山川帶刀陣刀よて盛秀よ

切つてかゝる主水亮盛秀　主「心得たりト同じく陣刀引きぬき渡り合ふ其のうちに船はヤリ〳〵　沈む士卒は彌〳〵　狼狽てる山川帶刀三四合打ち合つたるが　山「面倒なりト太刀投げすてゝムヅと組みついたり主水亮盛秀　主「心得たりト捻ぢ合つたが盛秀は厚金の鎧よて働らき自由ならず夫れよ引きかへ山川帶刀は眞つ裸体なれば身の取り廻し速やかゆゑ捻ぢ合ひながら海中へ跳り込んだり水練よは飽まで妙を得たる帶刀あれば難なく水中よて盛秀を討ち其の首を太刀の先きよ貫ぬいて再たび浮んで敵船へ跳りあがり　山「ヤア敵の奴ばら是れを見よ爾等が主人の主水亮は斯くいふ山川帶刀が打ち取つたるぞト大聲よ呼はつたり四國勢いよ〳〵騒動して磯際へ引取る併しながら片桐左右なく進み乘る陸には長曾我部摂部卿元勝「さては盛秀討ち死よなしたるかト悔むばかり併しながら味方先づ勝ち軍さなりと玉けふりの

晴れ間より見てあれば果して敵は八方へ引きたる体なれば四國勢ドッと勝ち閧をあげて勝ち軍さを賀す斯くて長曾我部元勝元「此りや者ども上方勢の屍骸汀端よながるゝは必定なり依つて磯端より海で長熊手より引きよせ死人をあらため甲冑を剝ぎ取るべし士卒共こまつてゐらふトいづれも熊手をもつて磯端へ出る中より四國の勇士山田勘太夫といへる者大熊手を携さへ磯端より突つ立つて汀を見てあれば大いなる屍骸殊更ら立派な甲冑を着したるものエラリ〳〵と流れ寄る「イデ是の屍骸を引揚げて其の甲冑を分捕りせんト件の屍骸へ熊手を引つかけズル〳〵ッと陸より引揚げたり然るよアナ不思議なるかな件の屍骸引きあげると其のまゝムク〳〵と動き出したり。

第十五席

殿下の總軍高知の本城より取詰る
信親引返し來つて上方勢を破る

山田勘太夫吃驚りして是れはソト跡へさがる然處を起きあがりさま件の人物は大音あげ「我れこそは上方より鬼神とよばれし福島が臣丹州福知山の城主福島左衛門太夫正則なり」ト呼はりあがら抜き打ちに山田勘太夫へ眞っ二つに割りつける其のうち此處彼處より流れつきし死人と見えし數一同にムック〳〵と起きあがり「大福島が臣大崎玄蕃此れにあり。つゞいて大橋茂右衛門此れにあり桂市兵衛此れにあり。可兒才藏尾石兵庫福島六兵衛海野彌兵衛星野又八郎等福島家名代の勇臣いづれも陣刀長甲を差しかざし浪打ち際よりをどり出で無二無三に切りたつる此れがためにあ恐をなして逃げ廻る此の手の大將長曾我部掃部頭大いにいかり「ヤ揃なきものどもの有りさまかな花は二十日人間百年の齢ひは稀なり各々一命を捨つる覺悟假令へ鬼神なりとも恐るゝことやあらん追つ取り圍んで敵の奴ばら一人もあまさず討ち取れや

ット下知したり是れよ驚まされて一旦退ぞいたる四國勢大浪の岩にあたつて返すがごとき勢ひよて取つてかへし上方勢を鐵桶のごとくよ取り圍む然れども万夫不當の福島主從心得たり面しろしト右よ引きうけ左りよ取り合ひ東西よ馳せ廻り南北よ摺れちがひ乱巴よ入りみだれ追いつ追はれつ血戰なす是れよつて屍骸は累〳〵と砂の上よ横たはり血は流れて小川のごとく打ち合する及び音い海面にとゝろき何日果つべしとも見えざりける然るよ此のとき磯際よある上方の軍勢一里ばかり沖の方へ漕ぎいだし流るゝ手負ひ死人を引きあげて改たむるよ軍卒二千餘人其の外よ福島主從相見えず諸人色をうしなひ此の段殿下の御座船へ言上よおよぶ殿下すこしも動したまいず　殿　正則い天下の英雄ナニかろ〳〵しく討ち死よするものよあらず仔細をあらんト仰せのところ忽ち磯端よ関の聲聞ゆるゆゑ殿下船腰よのぼりたまひ遠目鑑にて彼方ありしが大音よ　殿　アレ〳〵　甲の浦の濱邊よて大軍を相手となし勇戰してあるい正しく正則の主從と覺えたりソレ彼れを打たすな力を添へよトお下知ある諸將おどろいて畏こまりたてまつると各自の軍船よ乘りうつり漕ぎ出だす其の面〳〵にい片桐東市正且元脇坂中務太輔安治加藤左馬の助嘉明有馬中務太輔則頼平野遠江守長康粕屋内膳正知正引きついいて殿下の御座船それより大谷刑部少輔吉隆生駒雅樂頭親正前野但馬守長康田中兵部少輔吉政中村式部少輔一氏淺野彈正大弼長政エイ〳〵聲にて乘り出だす四國勢陸地へ寄せつけじと弓鐵砲よて支へんとすれども福島の働らきよて自由ならず其のうちよ上方勢我れも〳〵と踊り出で此處彼處よ現はれ四角八面より打つてかゝる命かぎり根かぎり是非とも破り味方を救へト切り廻る其の有りさまは當りがたく是れがために正則大いに

氣を得て大音よ　正「夫れ味方が來るぞ敵を退ぞけ早々柵を打ち破れ跡なる柵が先きへ行くは正則が恥辱なり下知をしながら切り廻る近づく奴は引つ掴みて投げ出だす夫れがために四國勢人波うつて崩れ立つ人間業とは相見えず恰かも第六天の魔王が天下り世界を奔走するごとく四國勢左右の敵よ惱まされ色めきわたつて見にたれば長曾我部右衛門太夫康親左右の敵を白眼みしが馬ををどらせ馳せきたる其の扮装よい十王頭の兜をいたゝき白草おどしの大鎧草ずり長よ一着おし紅葉栗毛の駿足よ淺黄三段の厚総をかけ白覆輪の鞍おひてユラレと打ちまたがり陣刀眞ッ甲よ飛龍の雲をおこすの勢ひを發し　康「ヤア〳〵我れてそい長曾我部宮内之輔が一族同苗右衛門太夫康親なり上方よ武勇自慢の福島正則どのへ家土の引導わたしてくれん福島正則い河原よあるや見參〳〵ト大音よ呼ゝッたり此の聲聞いたる福島正則怒りを万面にあらわし　福「ヤア奇ッ怪なる葉武者かなト大音よ上方武士のうち鬼と呼ばれる此の正則よ對し勝負をなさんなどとい片腹いたし能く〳〵一命冥利よつきたる奴か望みとあれば是非もないィデ此の世の暇とらせん。ト言葉の未だ終らぬうち右衛門太夫康親「エヽ然やうな廣言聞く耳もたぬ成らば手柄よつかまつれ双鎧けこんで乗り込み來り正則い歩行立ちなれば「彌れ眞ッ二つト頭上へ切りおろす福島「心得たりとうけ横よ搗へば康親手早くガッキと請けとめ一上一下虚々實々互ひよ開ゆる勇士と勇士秘術をつくして渡りあふ然れども正則の切ッ先き鋭どくして康親次第に跡じさり然處を正則踏み込んで「エイト一聲馬い前足を切りおとす康親馬上よたまり兼ね眞ッ逆さまよ落ちたりける福島「シテやッたり飛びかゝる康親早くも起きんとするを福島馳せよッて「康親が利腕ムンッと引ッ掴み「エイやット

肩にかついで浪打ち際へドブウーンと投げ込んだり四國勢此の勢はひよ勝易して我れ先きよと柵のうちへ逃げ込んだり元勝是非おく此れまた柵中へ引きあげる福島正則大いよ勇んで　福「夫れ此の圖をぬかさず付け入りにせよト走せ入る諸將思ひおもひよ亂れ入る福島大音よ　福「上方よ勇名たかき福島左衛門太夫正則當柵の一番乘りト呼はつたり續いて可兒才藏桂市兵衛大橋茂右衛門吉村又右衛門福島六兵衛大崎玄蕃星野又八郎いづれも名乘りかけて柵の内へ乘つ込ひ四國勢這は敵はじと逸足出だして先きを爭そひ散亂する上方勢得たりと追々船を乘りつけ殿下の御座船さで汀へ寄せ既よ秀吉公御馬に召して濱邊よお進みよなり、御自身采配を打ち振りたまひ　秀「ヤア福島を打たすナ進め進めトお下知ある是れがためよ上方勢いよ〳〵烈しく攻め立つたれば長曾我部揮部介元勝人數をまとめて逃げ出だす福島正則此

の圖を外さず追ひ討ちせんト勇み進んで追ひかける殿下は此の体を御覽あそばし　殿「長追ひ無用止まれ〳〵トお下知あれど勝ほこつたる上方勢耳よもかけず追ひかける依て殿下は引鐘をつかせたまふ是れよて諸將は引きあげる然れども正則は少し攝はず元勝を追つかけるソコデ殿下は　殿「福島を呼び返せ福島を呼びかへせトお下知ゆえ使番がしこまつて馬をあふつて　使「福島どの上意でござるお引揚げなされ御諚でござるお引揚げなされ如何よ福島でも上意だと言はれては押しきつて進むわけよ參りませんそれ是非なく引つかへし使番に伴なはれて漸〳〵　お床机備へ〳〵來つて殿下よ謁したてまつる其の姿た水に濡しよぼれて泥だらけ殿下此の体を見たまひ　殿「アイヤ正則爾が今日の働らき和漢兩朝よ稀れあり一万餘の四國勢殊よ此のところを守るは元親が一族なり然るよ主從僅か十人ばかりにて味方を離れ一命を的

の働らき且つ敵將を海中へ投げ込み息もつかせず柵を打ちやぶり猶はまた追ひ打ちをかくるとは天晴れ〳〵稱美なすよ言葉なし爾が勳功めづらしからずといへども此のたびは亦た格別なる正則頭をあげて　福「いさゝかの働らき高名の數にならず然るを殊のほか賞美の御意を蒙ふり有りがたき仕合せよそんじ奉まつりしらふあり且つ只だ今追ひ打つものならば皆ごろしよつかまつるべきものを殘念のいたりでございます　殿「成るほど其の方の心底よりは然やうに思ふであらふが敵も名だゝる者彌よ進退差しつまつたりと思はゝ必死となるは眼前なり然らば味方の軍卒を損ず是れよりて人數を引きあげさせしなり此の上は大濱高知の兩城と聞く不日責めおとさんこと心やすし即はち當座の褒美よ是れを與へん抑〳〵此の太刀は故右大臣どの〳〵秘藏ありし重寶ありしが去る天正十年三月二十三日の夜信

州上田よて眞田父子のためよ御危難のをり幸はひ吾僧中國より御加勢を願はんと彼の地にいたり圖らずも君を救ひたてまつつたる其の節褒美として我れよりたまはり是れまで陣中よ肌身はなさず帶せしを今其方よ與らするあり福島正則うれし涙をながして押しいたゞき　福「それがし聊さかの寸功を御感よあづかり斯かる比ひあき名刀を賜はる段此の身の面目有りがたき仕合せよ　殿「んじ奉まつる愛で殿下よは尙ほ片桐且元をはじめ夫れ〳〵戰功を御賞美あつて一ト先づ人馬の息を休め士卒の英氣をしと御沙汰あり翌二十日御軍令をさだめたまひ岸[illegible]たる軍船奉行として神子田半右衛門よ軍勢三十人をそへて殘りたまひ扨て大濱の城へは脇坂大谷淺野の三將へ命ぜられ三將一万餘人を引卒して城の四方を取りかこみ只だ一揉みと責め立つつたり斯くて殿下よは大軍を卒したまひ高知の本城へ御進發よ

なる此のをり阿波讃岐伊豫の敗兵おひ〳〵高知へ逃げ來る長曾我部元親甲之浦の合戰の次第を元勝より聞き「さても上方勢の剛なる斯はどまで殿重よ攝へしものゝ只だ一戰に破らるゝとは殘念至極ト切齒をなして口惜がつた然るよ殿下の惣軍いよ〳〵天正十三年十月二十四日よ高知へ押着陣家〳〵の旗馬印長刀は俄かよ深林の涌き出でたるかと疑がはれ松明大篝火提灯の照り輝やいて雲よ映したるは秋の夜の稻妻よ異ならず武者草鞋は地を埋め白晝は兜の星鎧の胸金物キラ〳〵と日光ようつりて映ゆきばかり時々刻々おこたりなくドッとあげる鬨の聲は天地もくづるゝばかり殺氣をつらぬいて相見え高知の城を十重二十重に取りかこみ假令へ金城鐵壁といへども只だ一揉みよ揉み破らん有り樣なり然れども殿下よは急よ城責めはあしたまはず只〳〵諸方の安否を待たせたまふ然るよ十月二十八日の早天よ羽三郎

信親久武内藏之助秋森勘解由等從兵二千五百人を引卒なし高知の城下よ近づいたるよ上方勢充分に入り口〳〵を堅めて最早や蟻の這ひ入る透き間もおし信親此れを見て「たとへ上方勢斯くのごとく取り卷くといへども如何よもして一方を打ち破り城中へ引き取りて武士の本意なれば父兄とゝもよ今一度籠城いたし花〳〵しく敵をやぶり献ずるとき生害におよばん進め〳〵ト下知したり從兵心得たりと二千五百人上方の一將中村式部少輔一氏が五千餘人の備へゝ鐵砲を打ちかけ〳〵押しかゝったり一氏下知して同じく鐵砲を合せ中「敵ゝ味方よ比ぶれば半ばよ足らぬ人數なり此の手の戰ひの血祭りよ一人も餘さず打ち取れやット下知して其の前路を取り切ッたり信親遙かよ此の体を見て

信ヤア小ざかしき上方武士の有りさまかなィデ其の儀ならば只だ一ト破りよ蹴破ってくれんト魚鱗よそなへ土烟りを立ッて

無二無三よ中村が大軍の中へ割ッて入り双方鎧をけづり鍔を割り切ッ先きより火花を出だして追ひ立つれば追ひかへさんと車輪のごとく馳せ廻り爰を先途と戰かッたり然れども信親の從兵ハ今日をかぎりと思ひ込んだる必死の者ども なれば突けども打てども事ともせず千騎万化と戰かッたれば流石の中村勢五千餘人血けふり立ッて總くづれとなッて退ぞいたり信親「ホッ」と一ト息して向ふを見れば此の次よそなへしハ平野遠江守長泰五千餘人なり 信「ソレ彼の備へも蹴破れ。ト 鶴しくらよすゝひ遠江守長泰 平「夫れット下知をつたへ五千餘人鎗ぶすまをつくッて待ちかける信親すこしも屈する色おく眞ん丸に備へて「ドッ」と喚いて乘ッ込みきたり無二無三よ突きたてる長泰も此處破れていなられと驚しく下知して應戰する此れが爲よ兩軍の蹴立てる土煙りハトウ〳〵と覆ひかゝりて天をかすめ宛がら暗夜のごとく喚き

さけぶ其の聲ハ山谷よとゝろき七轉八倒して戰かッたるが流石に必死を極し四國勢よ突やぶられ平野が軍卒五千餘人支かねて色めき立つ 信「夫れ此の圖をはづすな面々ト勵ましたつれば四國勢勢はひ込んで打ち立ッたれば今ハ平野勢防きかねて四度路よなッて散亂したり此の次に控へたるハ精谷内膳正知正五千餘人なり信親下知して備へを立てなほし今度ハ自身眞ッ先きよすゝみ例の目方二十一貫目の金材棒を水車のごとく閃めかし前後左右へ薙ぎ立て薙ぎ伏せ或ひハ猿臂を延べて人礫て乘ッ立て乘り廻り血戰する是れがためよ信親よ向ッたる精谷勢助かるものハ一人もなし信親またゝくうちよ精谷が陣を打ちやぶり駈け通り味方を見ると二千五百人のうち早や千人ばかり是れまでの戰かひよ打ち死よしたりと見え其の勢一千五六百と相成ッたり信親殿兵を駒の左右よしたがへ大浪の一時よ寄せるがごとくの勢ハ

ひよて次ぎの備へゝ驅せ向ふたり備て此の次ぎい有馬中務大輔則頼五千餘人早くも下知して館ぶすまをつくゝて待ちかけたり信親火燄のごとき息を吹き熱火のごとくゝ相成ゝたる鐵の棒を打ち振り眞ゝ先きゝ乘ゝ込み風車のごとく打ち振り當るを中天或ひゝ天地へ打ち上げ打ちすえたれゞ然しもの有馬勢も雪の上ゝ熱湯をそゝぐがごとく總崩れとなる信親主從息をもつかず猛虎の怒つて山を崩すの勢ひはひよて此の次ゝ備へたる加藤左馬之助嘉明が五千餘人の同勢へ跳りこみ例の金才棒をもつて信親東西南北ゝ馳せ廻り近寄るものは鎧の鼻ゝて蹴おとし最早雑兵などゝ目もかけず毛色よき武者を撰んで眞つ甲押しつけ揚卷の雄ひなく敵きすえたることなれば加藤左馬之助の軍卒も落花微塵と散亂す次ぎは日根野備中守高吉の五千餘人へ割て入り四角縱横ゝ打ち立て敵きすえ鐵の棒よりゝ「ヒユウ〳〵」と風を生し進撃

の怒りをなして荒れ廻つたるは恰かも阿修羅王のごとく是れゝ從ゝ勇士の面々素より必死を極めしことあれば得物〳〵を打ち振つてイヤ三途の川の道連れにせん最期の館ゝ先き冥土の土產に受けて見よゝト傍若無人ゝ呼はり七轉八倒して働らいたれば日根野の同勢も四分五裂と相成つて散亂したり

第十五回

（兩雄一騎打ち正則信親の得物を奪ふ　阿波讃岐伊豫平均諸將ゆ本營ゝ來る）

偖て豐臣殿下ゝは井樓ゝ登つて戰かひの有りさまをゆ覽あつて殿さて〳〵彌三郎信親といへる者は聞しゝ勝る武勇あり中村平野粕屋有馬加藤日根野の六備へを破る斯くては尋常の軍勢ゝては防ぎがたしトゆ感あつて即刻前野生駒田中の三將を召されゝ殿其方等三手合して彌三郎信親を防ぎ機會よくば彼れを討ち取るべし三將かしこまり奉まつるトお受ゝおよびゆ前を退つ

て即はち前野但馬守長康五千餘人生駒雅樂頭親正五千餘人田中兵部太輔吉政五千餘人都合一万五千餘人掛り貝を吹きたて太鼓を打ちならして進み來る長曾我部彌三郎信親陣頭より馬のり出だし屹と向ふを見てあれば上方勢整〻として然も大軍よて進みきたる　信「ヤア上方勢今までの敗軍に凝りてか此たびは大軍にて進み來るど今は味方も小勢とあり殊に一統勞れたれば一大事なり我れは是非一方を打ち破り本城へ引き取り武門の本意なれば親兄ともろとも防戦を遂げいよ〻敵はざれば槍よ火をかけ美んごと腹かき切つて潔ぎよく相果てん就ては爾等よく是れまで忠をつくしくれたるが最早此の敵を破つて共よ入城するといふことは出來ん馳せ向へば皆殺しよなるは必定なり开を知りつゝ敵よ向ふは無益のことなれば只今より何れへなりと落ち行き後策を計るべし必らず無益よ一命を捨つることなかれ是れ〻

も是れまで我れを捨ず忠義を金鐵のごとくなしくれたる段謝するよ言葉なし尤とも主從は三世の奇縁かならず來世も因あるべしイザ疾く〻落ち行くべし承たまはつて臣下一統聲を烈まし

臣「道は君のお言葉とも覺にず我れ〻ともにおいては抑も戰場へお供つかまつる砌りより生きて再たび歸らん所存はなく一命は無きものと覺悟まかりありいらふなり然るを只今となり此の場を落ち去れよとの仰せは必定不忠のものと思し召すと相見にいらふなり此れまでお附きやして盡しまいらせたる微忠の働らきを如何思し召しいらふやお怨めしくぞんじたてまつる此の上へはいよ〻一命を塵芥に比し討ち死よつがまつりいらふあひだ君は何とぞ其の間よ彼本城へ引取り然るべし兎も角も然やう遊ばさるべし信親大いよ感じ　信「天晴れの忠臣感するに餘りあり然らば爾等此の敵を防ぐべし必らず黄泉において再會す

べし皆〳〵一同喜こび勇み　皆「イヤ花〳〵しく最期の一戰を遂げんと互ひに血を啜んで咽喉をうるふし暫らく息をつく其のうち前野生駒田中の三手旗馬印をひるがへしドッと鬨の聲を揚たる其の聲は天地も崩るゝばかりなり信親尙はも向ふを見たる其の有りさまは地中よりわだかまる蟠龍の一陽來福の時を得て天に登るがごとくなり頓て鞍がさに突っ立ち　彌「ヤア敵は目にあまる大軍なり一同足なみをそろへ鉾先きを組んで突つ崩せ歩行武者は先きよ立ち騎馬武者は跡よ立てよト下知なす一統心得たりとエイ〳〵聲をあげて突てかゝる向かふたる上方勢は何れも高名武勇の諸侯一騎の面〳〵禄をいたゞき恩を蒙ふる譜代の郎等家臣ども此處を引いては恥なりと兜の鍬を傾ふけ鎧の袖を差しかざし骸は此の土よりさらすとも死して義名を子孫の面目につたへよト討ども突けども事ともせず打ち違がひ馳せちがひ立ち替り入れ替り揉み合ひける此れがためよ親打たるゝとも子は其の屍骸をかへりみず双方火花をちらして必死の戰かひ何時果つべきとも見わさりけり長曾我部が軍卒ども何れも今日を討ち死よと覺悟のことあれば水火よなつて責めたゝかひ互ひよ覺えの陣法ゆゑ陽よ開き破らず回まれず此れず黄石公が虎を縛する軍法手練張子房が鬼を取り挫ぐ奇變の陣法互ひに存じての上なれば百千の命をかざりよ一擧よ死をゞ爭そひける依て旗と旗打ち合してゐラッと開き斗のごとく巴のごとく双方引くな進めの力として天地震動し草木一度動亂せり信親戰かひ手間取るときい迎も切りぬけることと難たしと亂軍の聲打ち合する乃音ハトウ〳〵に駒をとゞめて味方よ向ひ信「ヤア〳〵我れより本城よ引き取るなり爾等此の敵を引き請けいらへいづれも言葉をそろへ臣かゝこまッていらふ如何よも此の手い面々引きうけいらふあひだ

時も早くお引取りあるべし　信然らば頼むぞよと信親二十四貫目の例の鐵材棒をリウ〳〵と打ち振り大軍の中へヤッと叫んで打ち入る有りさま宛然ら猛虎が群がら羊の中に入るごとく進退度あたり奇麗圏を外さず向ふ現れ此方あかくれ獅子分汎虎亂入あたかも人なきところを行くがごとく右に打ちすゑ左を敵き伏せ前ゑ現れ後ろよかくれ片々として梨花の舞ひ粉々として風雪の飛ぶごとく難なく一方を打ち破る上方勢夫れ逃すナ遣るナト大勢ひらがる信親金材棒を振りあげ「ハッタ」ト白眼めば「アッ」と逡巡して進み得ず信親尻目よかけて悠〳〵と城をさして乘ッ立てる田中吉政の臣村井酒造之助と名乘ッて鎗ひらめかし亂れ立ッたる中より踊り出で見參〳〵ト突いてかゝる信親「爾れ近寄ッて怪我いたすナ村井造酒之助怒ッて「何を不禮なト突ッかける鎗を信親「面倒ありト其の鎗をたゝきおとす酒造之助「遣い

殘念ト其のまゝ左り手へ乘り廻り「エイヤット組みついたり信親「心得たりト造酒之助が鎧の上帷引ッつかみエイト一聲眼よりも高くさしあげる此のとき一人の大將洗ひ革の大鎧片白の兜白毛の駒ゑうち乘り烈風のごとく鎗うち振り大音ゑヤア〳〵長曾我部信親今日の働らき感じ入つたり斯く申す吾儕は豐臣家譜代の長臣田中兵部大輔吉政なりイザ一ト鎗參らせん見參〳〵ト呼はりながら近づいたり信親是れを見て　信「爾ごとき小敵は我が相手とするゑ足らんト言ひながらエイヤット大喝さけんで件の村井を田中を目がけ投げつけたり吉政身を開く暇なく投げつけられた村井のためゑ馬上ゑたまらずドウと地上へ落馬ゑおよゑ村井は逆わるく側へなる石の上へ眞つ逆さまに落ち腦骨くだけて其のまゝ相果てたり此れがためゑ田中勢恐れて散亂ゑおよぶ信親夫れゑは目もかけず乾と正面を見れば上方諸大名の旗の手へ

んぼんと飜がへり殊よ殿下の陣營整〳〵と相見える信親思慮して進む此の時うしろの方より　久「アイヤ我君信親公何邊よお越しなされいらふや暫らく待たせたまへ久武内藏之助でござるト鎧はチギレ〳〵血染みとなり馬は乘りつぶしたるか歩行立ちよて陣刀を杖よあへぎ〳〵來る此の擊耳よ入つて信親駒をヒタリと止める然處へ内藏之助漸やく近づき信親が馬の右手に陣刀を突いて馬上を見上げる彌三郎其の体を見てハラ〳〵と落涙し

彌「ヤア久武内藏之助彌手しげく働いたると見は其の有りさまは依なく思ふぞシテ〳〵余を止めしい何ゆえぞ　久「然れば吾儕是れへ來りしは全たく一命を惜むよあらず君の陣先途を見とゞけんがためなり最早味方のとり少なよ討ち死よを遂げいらふなり然るよ君は何處へ陣越しなされいらふや正面は目よあまる大軍なり如何に陣武勇の君あればとて此の大敵よ向ふたまふは見

なく存じたてまつる　信「然れば此の大軍を我れ一人では迎も開く力はおい我々が運命も最早や此れかぎりと存ずる依つて此の勢はひよ乘じて秀吉が陣中へ亂入なし飽くまで上方勢を惱ましし冥土黄泉よてゝろよく赴ふかんと思ふなり内藏之助頭をふつて　久其の儀は陣無用〳〵未だ陣運極まつたとヤすよあらず然るに逸り陣討ち死よを遂げられいらはゞ元親公盛親公をはじめとして定めて本意おく思し召され陣歎きは必定なりヤすも如何恐れあれども凡そ大將たるものは假令へ必死の場合ありとも此れを凌ぎ命を全たくして時運をはかり必勝の謀略を回らしたまふを名將といへり其の昔し源の頼朝石橋山の旗揚げよ破れ朽木のうちに主從七人艱苦をしのぎ年月かさねて遂よ海内を靜謐となし中興の武將と登揚せり足利尊氏は西海の浪よ漂よひながら漸〳〵に天下を掌握なし十五代の基ゐを開きし例あり然るよよ

つて君も一旦ほ本城へお引揚げあつて大殿はじめ一統へほ評定のうへ兎も角もあそばさるべし願はくば家長久のほ協議ほ渾を開かせたまへ彌三郎信親是れを聞いて　彌「まことや烏の將は死なんとするとき其の聲かなし人の將に死あんとするとき其の言ふことや良し爾が終焉期の諫言尤ともに思ふなり然らば爾のいさめよ隨がひ本城よ引き取り評定におよふべし然りながら爾ごとき忠臣を此れよ捨ておかんこと如何なり成らば共に引取るべし身体の惱みは如何よ内藏之助涙を拂ひ　久「先づもつて吾儕が諫めをお聞届けなし下されいらふ段有りがたく此の体よりは所詮存命成りがたし吾儕にお拂ひなく早々お引取り然るべし彼れ此れするうち面倒なりイザ〳〵　信「然あらばと言ふうち後ろより大軍一度よ追ひきたる信親「さては味方のこらず討ち死よなしたるやト見かへる此のとき上方勢來るといへども近よらず時

よ一手の軍馬土烟りを立て馳せ來る何ものかと屹と見てあれば其の手の軍卒源氏車の大旗銀の戻り芭蕉よ猩々緋二段馬連の馬印を眞つ先きよ押し立てしは是れ福島左衛門太夫正則の同勢なり正則其の日の扮裝は萠黄糸おどしの大鎧おあじ毛五枚じころの兜を一着し黒の駿足よ打ちのり采配は腰なる采鉞にをさめ例の十六貫目込より石突きまで延べの大身の鎗を小脇よ掻い込み福者ども我れよ續けト眞つ先き乘つ立てきたる其の早きこと更よ馬足も地よつかず宙を走るかと怪しまれたり近づきさま四邊へどいろく大音よ　福「ヤア〳〵　夫れに控えたるは四國よ高名の英雄長曾我部彌三郎信親どのと見うけたり斯くいふ吾儕は上方よかくれなき鬼神を取りひしぐ丹州福知山の城主福島左衛門太夫源の正則なり相手よ取つて不足はあるべからじイザ一騎打ちの勝負よおよばん如何よ〳〵ト呼はつたり信親此れを聞いて扨

ては秀吉が羽翼とたのむ福島正則は爾ぢなるか望みよまかせて雌雄を決せんイデ來い來れト駒をすゝめ双方覺悟の一騎打ち両雄合ふては宛然ら仁王のゆるぎ出でたるがごとく此方ゝ例の金材棒正則ゝ延鐵の鎗をもッて打ち合ひしに得ものゝトウ〳〵と して風をおこすがごとく此方ゝ摩利支天の勢ひあれど彼方ゝ金剛夜叉の形勢をおし馬煙り土烟りゝ頭上へドウ〳〵と覆ひかゝり恰かも朧月夜ゝ異ならず久武内藏之助主人の大事と苦慮をこらへて見物してゐたるが流石が鬼をあざむく彌三郎信親ゝ先刻より敵度の戰かひゝ疲れたるか今ゝ受け身となりずりゝゝ引ゝ跡へさがる這ゝ信親ゝの危ふしと内藏之助地上に突きて杖としてゐた陣刀取りなほすと見たるが横ゝ拂ッて福島が乘ッたる馬の前足をバラリズンと切ッ拂ッたり如何に正則とゝへど剛敵と必死の戰かひ最中不意に横合ゝより此の妨たげがあゝ

たのだから馬上ゝ堪らず地上へドウーン落馬におよんだ得たり ト信親微塵ゝおれと打ちおろす金材棒ゝアハヤ福島落命したかと思ひのほか起きあがりさま早くも身を替し其の鐵の棒の先きを双手でつかみ「エイヤット引張ッた彌三郎信親是れ奪ゝれてゝと總身の力を双手に集めウシと堪へたエイヤ〳〵と暫らくの間ゝ鐵の棒の引ッ張りッくらを始めた然れども福島ゝ新手と言ひ歩行立ちだ彌三郎ゝ馬上と言ひ敵味の戰かひゝ疲れてゐるから今ゝ迚も敵はんと見て取ッたから氣合を計ッて持ッたる鐵の棒を放した福島ゝ放されて尻餅をつく其の透きに彌三郎信親ゝ双鐙蹴込んで本城へ「ハイヨウー引揚げる正則起きあがッて 福「おのれ卑怯あり、返せー戻せートト追ッかけたが彌三郎ゝ耳にもかけず殊ゝ馬術の達人だからナカ〳〵追ひつかない流石の福島も斷念めて途中から引ッかへし彼の分捕の鐵の棒を左りの手に引ッ

提げ右に自身の鎗を携さへて悠〳〵と陣本へ遣ッて參る殿下ハ井樓より屬島と信親の爭そひ驛たきを せず渉覽より相成ッて在したるが遂に鐵の棒を正則が奪ふや手を拍ッてお喜こびになる然處へ正則が能り出でたれば軍扇を開いて煽動り立て〳〵殿ヤ正則ずことよ其方が今日の働らき敵味方の目を覺したり四國隨一の豪傑と一騎打ちをなし落馬をいたしながら弱味を見せず殊より敵の得物を奪ひ取り猶ほも追ひ打ちいたす段まことよ感より絶ねたり爾ごとき英雄を臣としてハ予が幸福偏へに天下平均の瑞相なるべし正則鼻高々として 屬有りがたきお褒めのお言葉身の面目此の上もいハず先きよ伊豫口でハ主計頭清正まッた讃岐國でハ後藤又兵衛ひづれも彌三郎。と一騎打ちにおよびしと承たまはる然りながら彼れの得物を奪ひ取ッたるハ吾儕一人餘計な邪魔ものが出て馬足を切らざれば

彼れを手取りよして偉覽より供すべき誠とに殘念千万なことをいたしてござるト自慢をした斯う當人が天狗よおッてハ手の付けやうがないから殿下ハ「天晴れ〳〵ト傍賞美よなる然處へ備前より押しわたつて讃岐を征伐の大將大和大納言秀長公を始め諸大名まッた泉州より阿波へ乘り入ッたる三好中納言殿を始め諸大名まッた豫州より伊豫へ責め入ッたる加藤主計頭あらびに小早川吉川の両將等おひ〳〵恐夜の別ちなく道をいそぎ當御陣營よ來り即ち御前へ罷り出で拜謁を遂げいづれも殿下の土佐の國へお乘り込みの恐悦をヤし上げ且つまた合戰の次第を夫れそれ全たく阿波讃岐伊豫三ヶ國を平均の旨言上におよびました殿下聞しめされ未れ〳〵へ秀粉骨をくだき軍忠を勵み戰功を立ていらふ段天晴なり追ッて其の功を論じ夫れ〳〵賞を與ふべしト御沙汰あッて一同へ聊さか勞を慰するためと大將分ハ御前よ

おいて臣下の分ん諸卒にいたるまで其の陣所〳〵ゑ御酒を賜ゐりました。

第十七席

（清正磯揃が忠義を述て元親の免罪を乞　福島正則殿下の命を受て大濱城に向ふ）

此のとき主計の頭清正ゑ前へ進み出で　清恐れながら言上たてまつります不肖の吾儕ゑ陣代の大命を蒙ふり伊豫國を平均ゑおよびいふゐ一つゑゐ殿下の威光を頭ゑ頂だきいらふと又た一つゑゐ磯揃兵庫の助同内匠之助とゆす長曾我部譜代の臣下たる兄弟の者を理解をもッて味方に従がへ此の者を手段として諸所を攻めおとしいらふなり勿論彼等両人容易ゑ随身つかまつらずいらふ然るを吾儕が詰るところゐ長曾我部が家名ゐ君へ願ひ恙がなく取はからふべき段を想〳〵ゆしさとし漸〳〵得心させいらふなり依ッて何とゆ両人が誠忠ゑ免じたまひ長曾我部が家名を

お立て下しおかれいゐゐ彼れ等主従の大悦君の仁恵を永く忘却つかまつらずいらふなゆ此の儀我れ等よりも只管願ひ奉まつります殿下聞しめされ　殿「清正爾のゆすところ尤ともなり併しながら抑も此のたびの戰かひは我より事を好んだるにあらず既ゑ當國を責めんと評定の刻み磯が意見ゑもとづき一應上使をつかはし正理従順の道を説くゑ彼れ却つて無禮の返答ゑおよび剰つさへ孤城落日といふ今日ゑ至るゐ未だ屈伏の氣色は聊さかも見にず飽くまで敵對し明日ゑゐも當城を責めるゐらば死物ぐるひの働ちきをなし死を勇ましくせんとするゐ容子なり少しゐ農民等の困難は察しないのである然らば此れ天下を亂す國賊なり斯やうなる不敵ものは貶と其の罪を糺さずんはあるべからず天下を治めるの要は賞罰の二つゑあり三器ゑも善者には天祐を得て而ふして惡者ゑは其の誅を受くゑ安らして安ゑ善いたるとあり元親

は朝敵なり何んぞ天罪逃れんや尤とも今幾元親が領分たりし四國は平定の上は其の方を始め武功のものどもへ分ち與へんと思ふなり此れ即はち賞罰を明らかにいたすのあれば然やうに存するが宜い清正倘は勝をすゝめて　清正仰せ侍尤ともに存じ奉まつる然れども彼れ元親朝敵なりといへども此のたびの合戰私欲にあらず全たく足利義榮が遺言をまもり鶴音丸をもッて足利の天下を再興せんと存し立ちしものなれば其の情に義心のあすところ豈に尊常のものなりせば君の御威光におそれ時務を計ッて幕下に相成るべし然るを義のためにおもに國家を忘れしらふに天晴れなり冥土黄泉にある義榮の喜こびに如何ばかりならん且つまた長曾我部い桑の始皇帝の末流本朝に渡來して秦の川勝とやし聖德太子に仕へたてまつり佛敵守屋の大臣を征伐のみぎり莫大の戰勢あッて當國に移住し曾我部といふところをッて數百年

相續の舊家にてゆ這い吾儕が今さらやし上げずとも君に入れ素より知ろしめしたまふことと然すれば出格の思し召しをもッて家名を立ておかれまするも恐れながら君の譽れ且つ其の御鴻恩肝に銘じ彼れ等一統のもの忠勤をつくしいらい天下のお爲めならんかと存じたてまつる倘はまたお聞届けなきときは磯揃兄弟が誠忠むなしく相成りいらふまゝ篤と賢慮のほど願いしう　殿「其方が意見一理あり然らば予が計らふべんじたてまつる　清「仰せ侍尤ともに奉まつる。ト清正前をしりぞき磯揃兄弟を召しつれ再たび仔細あり依ッて磯揃兄弟を早速此れへ連れまいれ　清「かしこまり奉まつる。ト清正前へまかり出でる殿下御覽あッて　殿「いかに兵庫之助内匠之助爾等兄弟誠忠のおもふき清正より巨細聞きとッた然りながら長曾我部元親が此のたびの敵對い足利の後ろ立てとなッて天下を亂さんとする古今の奸賊朝敵なり依ッて家名を立てつかいす

こと相成りがたし此れ予が私しにあらず天下の大法なり且つ爾等が誠忠心い感ずるよ絶にたりといへども其の儀相叶はず篤と其の道理を勘考いたすが宜い清正傍らより　清君の御諚尤と　もよは存と奉まつれども先刻な願ひ奉まつりいらふ通り何とぞ出格の御仁恵をもつて長曾我部家名の儀立て下しおかれますやう重ねて願ひ奉まつる磯揃其許よりも歎願つかまつるが宜い。兵庫之助恐る〳〵頭を上げ　磯直答恐れ入りたてまつりいらへども主家の退轉は悲嘆の最上よいらふ間とぞ格別の御仁恵をもつて假令小祿よ相成りいらふとも成り行きなれは是非是れなくいらふあいだ苗跡つゝがなくお立て置きの儀只管ねがひたてまつる　殿「イヤサ爾等のやうよ元親一藩のものども心得をれば兎も角も彼れは今にも戰かはんの心底依つて重罪の元親を始め一類のものども所詮家名は勿論助命もゆるしがたし又た爾等は眞と忠義といふべきもの武勇まで天晴れなり以來は余が家來とすべし依つて其の印として土佐半國を兩人よ與へ諸侯よ取り立てん就ては其方等へ人數三万人を貸しつかはしいらふあひだ早々軍馬の用意よおよび高知を攻めおとし元親父子の首を得て余が實檢に入れべし主人よ弓を引くといふは甚はだ如何よ聞ゆれども　殿は其の主よよるべし既よ武王殷の紂王を弑して万民をすくひ永く天下を保ちし例あり孔子も言はずや一夫の紂を誅するを聞く未だ君を弑する所以を聞かずとある然らば主ありといへども惡逆增長して四海の憂へを引き出さんとするときは討つとも苦しからず是れ私しよあらず天下の爲めなり然れば爾等よおいても此の理を辨まへ追手は向ふべし又た此の儀を爾よ命ずるは餘の儀よあらず城郭の勝手を能く知るならんと思ふゆゑなり要害万端籠城の模樣弓矢の深淺心の强腦を知ると知らざるは大いな

る得失あり且つは今より爾等を諸侯の列に加へることなれば進撃攻撃の進退も篤と見聞つかまつりたし依て斯く命ずるのであるから速やかに其の功を立つるやうつかまつるべし磯揃兄弟大いに迷惑の体にて暫らくは無言でをつたるが何か思ふところありげん兵庫之助と内匠之助互ひに目交せして兵庫之助頓て殿下にむかひ　兵段々の御怨命有りがたく今さら無明の夢相覺めいらふなり誠とや鴻鵠は高本に巣をつくり魚龍は深淵に穴を穿つて朝に宿をもとむと古賢のをしへ然らば御諚にしたがひ殿下の御家人と相成り軍勢をもよほし高知城に向ひやすべし尤とも只今の御上意にて和漢兩朝に君を弑し其の國家を全たふしたる例しを思ひ出だしいらふなり唐土にあつては彼の春秋のとき晉國の政事亂れしかば趙項其君を弑し奉ると雖も此其國を治めんが為又本朝には長尾爲景上杉房義を討て且景勝今越後にあつ

て武威さかんなり此理を考へいらふときは全く御理解に符合つかまつりいらふ此の上は猶豫すべきにあらず速やかに高知の城を攻めおとし土佐半國を頂戴つかまつり先祖の家名を輝やかしいらふことに存意に相かなひ有りがたく御ぞんじ奉つる夫れにつき只だ今お墨附を下しおかれたく存じたてまつる列座の諸侯目と目を見合せ彼奴殿下の御諚を疑がつてをるのか未だ功を奏さんことにはお墨附をくれろとは上を憚からざるやし條であると思つて殿下の御容子を伺がつてゐると果して殿下には此の言葉を聞し召すとサッと御氣色を變へさせられ　殿いかに兵庫之助扨ては爾余が言葉を疑がふと相見えたり假初にも人身の司さたる關白の職を汚す秀吉なり決して變ずることおし安いたすべし兵庫之助恐れ入りたてまつる全たく吾儕御上意を疑がひ奉まつるにあらず然れども長曾我部父子は當今比ぶものなき大敵に

いらふなり都で武士戰場に赴ふきいらふよ一命を全たふして立ち歸らんと覺悟つかまつりいらふては向ひがたし今其の例しを申し上ぐれば往古下野守源義朝が後白川の院のお味方つかまつりいらふ節其の父六條の判官爲義あらびに其の子息等は崇德院のお味方となり北白川の御所に楯てこもる此のとき後白川の院より義朝を朝廷に召されて沙汰ありけるは今度父六條の判官爲義ならびに爾か舍弟四郎左衛門頼賢おなじく鎮西八郎爲朝は由々しき大敵なり爾馳せ向つて父の爲義ならびに弟どもを討つて立ち歸らば大功なり乘ては禁裏の昇殿をのぞむよし叡聞に達す依つて其の功をあらはしたる其のときは昇殿をゆるすべきあひだ急ぎ馳せ向ふべしと少納言入道信西をもつて勅命ある此のとき義朝奏しけるは願はくば昇殿免し下しおかれるとならば未だ合戰に向はざる以前に仰せつけらるべし昇殿つかまつるも

一命あつての昇殿なり戰場にのぞむには死路に赴ふくなり一命を全たふし立ち歸つて昇殿つかまつらんといふ所存にては迚も勝利覺束なし一世の思ひ出に昇殿つかまつり其のゝち戰場に向ひ勝利なくば討ち死につかまつるべしと申せしかば立ちぞてろに昇殿を勅免ありしとかや承たまはりいらふ吾儕とても其のごとく向ふものゝ臣下籠るところの者は主人たり乘て武勇は存じをることとなれば千に一つも命ちを全たふして立ち歸らんとはせず是れ即はちお墨附きを乞ひたてまつるは未だ向はざる以前に昇殿の望みを達したいといふに同じ然れば此の儀冷免あるにおいては即軍馬をすゝめ身命を抛うつて雌雄を決しいらはん依て此の儀を願はたてまつる殿下尤ともに聞し召し　殿彼の尉源子が言葉にも將に命を受くるの日其の家を忘る軍を張り野に宿して其の親を忘る鉦鼓に接して其の身を忘るとある兵書の表に

かなへり存命のはゞ覺束おしとのゆし條尤とも閑ゆる然らば認めて與すであらふト料紙硯をお取り寄せよなり土佐半國の侈朱印を認ためさせられて下しおかれる兵庫之助内匠之助おし頂だき　兵「斯くお墨附きを賜はる上は我々の面目有りがたき仕合せよ存じたてまつる此の上は過急よ馳せ向ひゆすべしト侈前を退ぞき夫れより兄弟は主計頭清正の陣營よ參つて木村又藏に對面し何うか主計頭どのへお目よかゝりたい宜しくお執成を願ふと頼みました又藏心得て主人清正よ磯揃がお目通りを願ひたいとゆし出でた趣ふきを言上よおよびました主計頭早速磯揃よ對面いたしました　清「火急よ對面をゆし込れしは何用あつての儀よや　兵「然れば只今侈前よおいてお聞きおよびの儀全たくは斯くおして主家の再興を願ふ所存よて如彼なせば聊さか微忠と心得ゆらふ哀れ願はくばお墨附きを主人元親へ下しおかれゆらは

ゝ直ちよ城内へ赴ふき降參をすゝめゆらふなり尤とも只今殿下を欺ふきたてまつりゆらふ罪のがれす彌〳〵主家全たきを見ゆらふうへゝ如何やうのお仕置仰せつけられゆらふとも吾儕本望よてゆらふなり然れば侈誠にしたがひお請けにおよびしゝ斯くお墨付きを頂戴せんがためなり何とゞ吾儕が微衷をあはれみ侈前休しかるべくお執成しを願ひたてまつると思ひ入ってゆし述べました清正感心あって　清「さてゝ然やうの心底なるか如何よも執成しつかゝさん暫らく陣所よあって我が沙汰するを待たれよト是れから清正侈本營へ參し殿下のお目通りへ出て委細言上よおよびました殿下侈感心なゝめならず　殿「實よ家貧しうして孝子あらゝれ世亂れて誠忠の臣出づと宜なるかな然らば再たび對面するであらふから早々本人を召し連れべし　清「かしこまり奉まつると主計頭侈前をさがり磯揃兄弟を召しつれ再たび侈前

へ能り出づる兵庫之助内匠之助「ハッピト平伏よおよぶ殿下左右を見かへり「何れもよく承たまへるべしとあッて磯揃兄弟よ向ひ曰まひけるハ　殿「和漢とも天下ならびに國郡を得るよいたりてハ君臣父子兄弟の中よも爭そひを生ずること例し少なからず齊の桓公ハ春秋の宗傑といへども兄紂をほろぼして齊を奪ふ唐の安祿山ハ玄宗皇帝をしりぞけて天下を奪ひ國號を大新とあらため大新皇帝となる然るよ男子二人あッて兄を安慶渚弟を安慶思といふ素より兄よ家督をつがしひるが正當なるよ此の兄を廢して弟安慶思よ天下を與へんとす此れを聞いて兄の安慶渚いかッて忽ち父の安祿山を弑し其國を奪ハんとし大亂となる近くハ我が朝よてハ美濃の國の齋藤治部大輔義龍ハ其の父道三をほろぼして國を奪ひ武田信玄ハ名將といへども其の父左京太夫信虎を押し込めて甲州をうばひとることと皆な人の歎するところなりま

ことよなんぢハ古來まれなる所ろの忠臣よして畜の豫讓漢の紀信なども恥づべきところなり世の主よ仕へ臣下となるものハ宜き摸範おり此のうへハ願ひにまかせ元親父子幕下に屬するよおいてハ當國一圓を與へん尤とも數多の家人を扶助せしことなれバ一國にてハ夫れ〳〵へ行きとゝくまじ且つまた爾等城内へ參るものなるバ有無を聞かず如何なる變事のあるまじきものよあらず依て別に人撰のうへ上使をもッて爾等が誠忠の次第をゞし聞せ降參の儀を說諭さすべし然らバ元親父子一言のもとよ承知するやう取り計らひかたあり开ハ大濱の城にハ足利鶴音丸楯てもりをる是れを生捕りとなさバ後ろ立てをうしなひ夫等の當惑より速やかよ降參すべしと思ふなり此の儀を先きへ取り計らはん爾等両人かならず安心すべし宜きよ計らひつかハすべし就てハ先刻爾等よあたへたる墨付ハ此の場で差し出せよ磯揃兄弟

有りがた涙よくれをぬたりしが殿下のお言葉をはるや両人頭を
すりつけて　兵「ハヽッ有りがたき御諚勿体なくも殿下を欺ふき
たてまつりし其のお咎めなく却つて我々が望みを達するやう
御計らひ下しおかれまするとは何たる御仁恵御鴻恩のほど謝し
たてまつる言葉なく誠とよ以つて我々の喜こび此れよ過ず。ト九
拜して御恩のほどを謝したてまつる此のとき殿下御前よ伺候す
る諸將を見わたしたまひ　殿「誰れかある大濱よ向ひ鶴音丸を擒
とするものはあらざるか。ト お言葉の下より福島左衛門太夫正則
進み出で　福「不肖ながら此のお役目吾儕へ仰せつけられいらは
ゞ如何よも相違なく生捕つて御覽よ入れたてまつるべし。殿下聞
しめされ　殿「ム然らば爾よりしつけるあひだ速やかよ鶴音丸を
生捕て參れ　福「かしこまり奉まつる。ト お請けよおよび御前を退
つて正則おのれが陣所へ立ち歸り僅かの家臣を引連れて大濱城

へ出張いたしました

第十八席

（正則鶴音丸を擒よし且元高知城よ使す　元親父子降參四國平定して殿下旋凱す）

扨て又た大濱の城よゝ足利鶴音丸を大將として三好下野守存保
山崎將監等人數三千人よて籠城よおよぶ然處へ上方勢淺野脇坂
大谷等一万餘人よて取り圍み嚴しく責め立ッたり然れども城郭
堅固よして城兵必死と防戦するゆゑ勿〳〵急よゝ落城すべしと
ゝ見えませんに依ッて責め口を遠巻きにして白眼あッてをる此處
へ福島正則來りて三將よ對面し　福「さて吾儕こと殿下の台命を
蒙り斯く出張よおよんだり其次第ゝ斯く〳〵。ト磯揃兄弟が誠忠
の次第をものがたり　福「就てゝ長曾我部元親を降參なさしむる
に付き元〳〵彼れがお敵對したる原因ゝ足利鶴音丸を補佐し足
利の天下を再興せんといふにあれゞ此の鶴音丸を擒よすれゞ彼

れ必らす降參すべし依て吾儕に其の大役を命ぜられたれハ此れより城内ゑいたり首尾よく鶴音丸を擒ゑする心得でござるから各々方も此れゑあッて吾儕が手腕を見物あれ。三將是れを聞いて腹のうちでハ呆れかへッた中ゑも淺野が　淺「福島氏スリヤ全くのお話しでござるか　福「是れハ怪しからん何で各々がたゑ僞わりヤすべき正則生れてから人ゑ對ッて虚僞わりをヤしたことハござらん　淺「併し貴殿いかゑして擒とせらるゝや我れ〳〵三手斯く責め立ッてさへナカ〳〵落城すべき氣色もあらざるゑ福「ハヽヽ夫れが正則方寸のうちにあり默止ッて傍見物あれ。斯う言ハれたから淺野ハ默止ッてしまッた併し三將ハ目と目を見合せ腹の中でハ何の福島ゑ鶴音丸が生捕れて堪るものかト思ッてゐると頓て城門際へ參ッて正則ハ家來の桂市兵衛を呼んで何かロ上を言ひふくめました　市兵衛「かしこまりハらふ。ト大廣城の大

手のところへ遣ッて參いり城内ゑ向かッて　櫂「ヤア〳〵城内の人々能く聞きハらへ殿下の傍上使として丹州福知山の城主福島左衛門太夫正則まかり出でたり開門〳〵と呼はつたりッコデ大手の番士から此段奥へつける承まはつて三好下野守山崎將監一統をあつめ評定ゑおよんだ此のとき山崎口を開いて　山「福島は上方ゑおいて勇士の聞にあるものなり此れが上使として來るは仔細ぞあらんトヤして高知の便りは上方勢に支えられ聞くと能はず何は然れ一應通して趣意を聞かん尤とも四五人ばかりの供を連れるとあるからは聊さか恐るゝゑおよばす勿論彼れ一人を通さんと存ずるが各〳〵如何存ぜらるゝや三好下野守　上「如何にも山崎氏仰せのごとく假令へ又た計畧あるとも福島一人あれば何はものことあらん早々此れへ通すべし「かしこまつていハらふト須藤平馬といへる者出むかへ大手の門を開き上方の傍使

者福島殿ゆ案内つかまつればイザ本城へお通り下さい爰で正則家來の桂可兒大橋尾石の四人を城外へ殘し案内よつれて悠々と廣間へ通る此のとき三好山崎其の外名ある面々列をたゝして控らふなり吾儕は當國足利鶴音丸の執權三好下野守存保とゆす者なりゆ口上の次第承たまはりたく存ずる福島正則座をたゝし福然あらばゆし述べん扨て此のたび長曾我部元親我意をふるまひらふより四國のあひだ修羅の街となること是非もなき次第なり定めて聞およびもあらんが殿下のゆ武德によつて既よ三ヶ國は平均よ相成る尤とも當國は大濱高知兩城よ迫つたり最早や長曾我部が滅亡近きよあり夫れよつき殿下深く歎きたまふは足利ぞのゝことなり抑〳〵清和のゆ末等持院尊氏ぞの四海の惑亂を切りしづめ十善万乘の君の良慕を安んじ奉まつり下万民塗炭

の苦しみを救ひ諫鼓苦ひす治世となりしより凡そ十五代のあ間だ征夷大將軍の大職を蒙ふられしところ去る天正元年義輝ぞの諫者のためよ信長公を怨み必得ちがひあつて宇治の槇の島城よ楯こもりたまひ織田ぞのゝ大軍を引きうけゆ防戦のところ終に叶ひがたく既に義輝公ゆ生害とも相見にたりしところ我が君いまだ木下藤吉郎とゆせしとき信長公を諫めゆ助命を取り持ちまふ依つて備後の鞆へ落ちさせられ毛利の扶助となりしこと世上の人の知るところなり斯やうよお命を乞はれしも前段の通り本朝の名家殊よ武家の棟梁たるよ依つて斷絶よおよばんことは異國までの恥辱旁〳〵淺からず憂ひたまふところなり依つて鶴よも鶴音丸ぞのよりお願ひあらばゆ家名は立ておかるゝとかろなるよ其の儀なく此の仕宜よ及ばれしは殘念のいたり今よ殿下を喜ひたまふの思し召しあらば隨分執成しいたすべし當

の興廢は只だおの〳〵がたの心底にあり頼みといたさるゝ長曾我部が滅亡は眼をめくらすべからず依つて一應此の儀をヤし入る各々返答いかにヤし述べた承たまはつて三好下野守當惑の体山崎すゝみ出で　山「ヲロ上の趣ふき一應評定のうへヲ返答ス及びいらはん依つて暫らくのうちヲ休息下されたい　福「然らば暫時は猶豫いたしヤすあひだ早々ヲ評議ニおよばれい爰で三好山崎は別室へ赴いて何やら相談のうへ再たび福島が前に出で來り三好下野守口を開いて　三「さてヲ上使の ヲ理解は至極ヲ尤ども存じいらふなり只今迄殿下へお敵對ニおよびいらふ段深く後悔つかまつりいらふ此の上は足利の家名お立て下されいらはゝ有りがたき仕合せ何とぞ貴殿より宜しくお執成しを願ひヤす福島うなづいて　福「然うなくては能はず就ては殿下の ヲ前へ説り成しヤすまつい丸どのへ一應對面いたしたく多本

人を知らずしては不都合なり三好下野守ヲ尤ともあるお言葉然らば即刻ヲ對面あるやうつかまつるべしト引き退ぞく間もなく下野守　三「福島氏お居間へお案内ヤす正則案内につれて罷り通る正面の上段ニは ヲ簾が垂れてある左右ニは重臣數名ながれてゐる頃てシイー……シッといふ警蹕の聲とゝもに ヲ簾をあげる皆一同平伏する福島正則見上げると玉を欺ふくばかりの ヲ容顏流石は足利家の ヲ正統と腹のうちニ思ひながら　福「吾儕こそは上方ニおいて鬼と呼ばれる福島左衛門太夫正則にござると言ひながらずり〳〵と近よりさま踊りあがつて ヲ簾のうちへ飛び込み突然り鶴音丸君を小脇にかい込み突つ立ちあがる鶴音丸どの驚ろいてキャア――キャッと喚きたまふ一統のもの驚ろく中にも三好山崎大いにいかり　三「扨ては謀りごとなるか其の儀ならば只だ一ト討ちト小刀の柄ニ手をかける正則大音ニ　福「控ひ

ろ此のたび四國騒乱の根本は此の鶴音丸ならびに爾等あり天下を亂す奸賊乾度糺明せんため斯くゝ取り計らひしあり我れも聊さかにても手向ひなさば鶴音丸が細首打ち落さんと小刀を引き拔いた皆々是れゝット猶豫する正則何ぞ大音に　福「鶴音丸ゝ我れ連れ行く併し一命に關はるやうなことゝあい爾等神妙にして追ての沙汰を待つべしト悠〳〵と城を出る三好山崎を始め一統の者呆れ果てアレ〳〵トいふ間に正則ゝ城外に出た淺野脇坂大谷の三將ゝ打ち寄ッて　淺「何の福島が彼んな大言を吐たとて然う安〳〵と鶴音丸を擒にすることの出來るものか　脇「然うとも〳〵何で福島に其んな眞似が出來るものか　大「イヤ然う誹謗たふナ何ういふ手段で生捕て參らんとも限らんからト言ッてるところへ正則が鶴音丸を可兒才藏に背負せ桂大橋尾石と共に是を警固して鳥高〳〵と歸來ました三將是を見て　三「ヤア福

島エライ〳〵何うして然旨くやった　福「何だい吾儕の智惠は孔明柿も三舍を避るだらふ斯〳〵斯して連て來た。ト話す三將手を打って　淺「成るほど是れはエライ。ト感心する是れから福島道を いそぎ殿下の御陣營へ罷り出でゝ委細を言上よおよび殿下に感心あッて鶴音丸ぞのを彼陣營へお止め置きになり　殿「此の上ゝ高知へ使を立てん。ト座中を見廻る一統列をたゞしてゐならび皆〳〵　甲「我等へ仰せつけらるゝか　乙「吾儕へ仰せつけらるゝか。ト拳をかため殿下のお顏を見上げてゐると頓て殿下ゝ「ヤア〳〵片桐且元此の使者爾よりしつける城内へ赴ふき元親父子を說き降參つかまつるやう致して參れ。且元ハッ不肖の吾儕へ彼上使の大役仰せつけられ有りがたく君の威光を頭よいだゞき如何よも降參いたさせられん。ト彼前を退ぞいて片桐東市正且元支度よおよび柿色に白く芭蕉の大紋に立烏帽子を頂だき小さ刀を帶

し供人十人ばかりを召し連れ遊をいそいで頓て大手の城門より來り片城内へ物申す吾儕ハ殿下の使内よおいて攝州茨木の城主片桐東市正且元なり此のたび殿下より上使の役儀を蒙ふり罷り越し候らふなり早く開門〳〵。ト呼ハる城兵うけたまハッて暫らくお控を下され。ト待たして奥へ達す扨てまた城内よりハ武門の習ひかれハ飽くまで防戰の用意をなしイザ敵ハざる場合よいたらハ槍多門よ火を放つ手當をなし潔ぎよく切腹いたさんと元親はじめ一統其の覺悟をいたしてをッた然處へ殿下よりの上使と聞き元親一統を呼び評定よおよぶ彌三郎信親すゝみ出で「上使とあるからハ城内へ通し先づ其の趣意を聞いたる上よて兎も角も彼取計らひあッて然るべし。一同此儀もッともと評議一決し久武豐前元山將監の両人出迎ひとして玄關先きへ來り門番よ命じて開門させ頓て入り來りました且元へ　久「此れは〳〵

彼上使彼苦勞に存じ奉まつる我〳〵兩名お出迎として是れまで參つていらふイザ彼案内つかまつる且元案内よつれ大廣間よ通つて座につく先づ正面よは長曾我部元親左右よは孫太郎彌三郎その外家臣よは桑名太郎左衛門政信同苗彌次兵衛信家野中三左衛門吉川伊賀守季武谷忠兵衛南剛四郎家勝東條紀伊守國時同玄蕃野村又右衛門山川五郎太夫中之内惣兵衛近國中島大和守十市新左衛門細川源右衛門貞政等一同列座におよぶ且元悠然として敬國入間六郎左衛門貞政等一同列座におよぶ且元悠然として扨て殿下より吾儕を上使として差し越されたる其の次第は先達て石田三成をもつて長曾我部氏よは殿下の彼慕下と相成ハ供に軍慮を助け天下泰平の計議をいたしいらふやう達するところ一圓承引なく却つて上使よ對し無禮のことぞも是れあるよし大國の主よ似合はざる致し方なり依つて止むことを得ず征伐よお

よびたまふところ斯くの仕宜よて最早や高知一ヶ城と迫まるなり然るうへは如何やうよ武略を回らすといへども其の儀叶はんや依つて過まちを改め自今浮慕下よ相成りしらふにおいては土佐一ヶ國は安堵仰せつけらるべし尤とも飽までお歎對よおよびしことゆゑ尋常ならば一ヶ國を下しおかれしらふ儀は勿論助命も相かなはざるところなれども當國よて數代の舊家殊よ弓矢を取つて隱れなし中んづく磯揃兄弟が誠忠かた〳〵にて右の通りなし下されるといふ有りがたき上意なり斯く浮仁惠の厚き思し召しを存ぜられお請けにおよばれて然るべし元親此れを聞いて　元吾儕此のたび斯く合戰におよびしは私欲よあらず此れ足利どのゝお頼みよ依つてなり然らば天下を倒す好賊よあらず此れ即はち義なり忠なり又た敵はざるときは父子を始め家臣よいたるまで衆て死を潔ぎよくするの心底なり何ぞ今さら命を惜み

膝を屈して降參におよぶべきや義のためよ捨つる一命一毛を惜くよりも易し只だ此の上は武門の本意なれば今一たび防戰なし死を急ぐこと覺悟の前なり且つまた譜代の臣たる磯揃兄弟が上方へ隨身なすも此れ我が家名の滅亡の印しなり强がち磯揃を惜ひよあらず　片其の磯揃兄弟は古今の忠臣依つて斯く殿下の浮上意あるところあり　元假令へ磯揃兄弟が誠忠よもせよ今降參なすときは一旦足利義榮どのより天下再興の儀を承たまはつたる其の趣意よそむき黄泉の義榮どのゝ思し召しも如何と恥辱よ存ずるなり依つて我れ〳〵相果てんといふは黄泉の義榮どのへヤし開きの心得よていい　片いづれもヤさるゝところは潔ぎよく開ゆれども少し思慮の足らざるやう存ずるなり　元ナニ我れ我れが鐵石心大丈夫の志ざし信義のためよ死を極めたるを思慮なしとは其の意を得ず假令へ上使といへども仕宜よよつては此の

座は立たせゞさすト身がまへあす　片然れば其の趣意如何よと
いふよ我が國は忠孝義の三つをもつて大法人道とす洋邊の只今
の雷業にては忠孝義の三つを捨てゝあらるゝと相見にたり信親
すゝみ出で　彌何ゆゑ忠孝義の三つを缺くとゞさるゝや　片然
れば足下父子を始め戰場に身命を捨て國家妻子を忘れたるは誰
れがためよ成されしぞや此の儀を承たまはらん　信此れは珍ら
しきお尋ねかな其の儀については父元親よりお答へよおよびし
らふ通り鶴音丸どのをもつて足利の天下再興のためなり然れゆ
も武運つたなくして成就せざるは天命の然らしむるところなり
且つまた古しへより運命つきて相果て國家の斷絶よおよびしれ
の私淡兩朝に其の例あげて算へがたし然るを何ゆゑよ貴殿は然
言はるゝや吾儕は決して忠孝義を背くとは存じゞさずしらふな
り　片然れば其の儀よ思慮の足らざるところあるなり各〳〵洋

親子一統武士の意氣地を立てとはし相果てらるゝときは當年十
一歳の鶴音丸どのを誰れが守り立てしらふや殊よ鶴音丸どのは
篤より捐どなしたり假令へ捐と成さゝるとも お世話する人なき
よおいてはお身の上にかゝはることもわらんか依つて各〳〵降
參におよばるゝものならば鶴音丸どのゝ洋身よ恙があし其の儀
もかへりみず自まゝの行ないをされんといふは是れ忠よ欠くる
なり且つまた我が名を清くすることを旨として相果てらるゝと
きは忽ち數代相續の家名斷絶よおよぶべし且つ先祖楽の川勝
どのより數代の功業を空しく水の上の泡よ等しくすること即は
ち孝の道よ背けり五刑の罪三千而ふして其の罪不孝より大なる
はなしとある然らば不孝は罪の甚はだしきところなり三つよは
足下譜代の臣磯揃兄弟は迚も此のたびの一戰は敗はざるを察し
加藤主計頭よしたがひ一つの功を立て万一のときには各〳〵の

助命を願ひんとの誠忠を殿下にも深く感心ましく〳〵依って吾輩上使の役儀を蒙ふるところなり勿論遅がた降参なきときは定めて磯揃兄弟切腹いたすべし彼等が誠忠かへって不忠と相成り可惜ら家來を犬死さすといふものなり主人として其の家來を哀れまざるは此れ仁義を捨るといふものなり併しあがら吾輩が述ぶるところは定めし心底よかなはざるべしト滔々と述べました流石の長曾我部元親を始め一統の臣片桐が説くところ其の理非明白なれば有無の言葉なく座中しらけわたって見えたり此のとき元親何思ひけんスラリと短刀抜くより早く我れと我が髭の毛を切って且元に向ひ　元親ことよ片桐どのゝ言葉理非明白よして今さら我れ〳〵が答ふるところなし依って此れまでお敵對よおよびし上は中しわけのためよ剃髪なし最早や武道を退どき際通同やうの身と相成りいらふあひだ是れなる倅孫太郎彌三郎の

三郎の兩人を勤仕つかまつらせたく然るべく頼みたんずるなり　トいづれも降参の心底なるにぞ　片夫れでこそ當家の永久双方の幸福とやすものかな〳〵　承引の上からは親子とも殿下のお目通りなさるべし同道いたしやさん　元然らば何分とも宜しくお引廻しを願ふト元親はじめ孫太郎彌三郎禮服にて片桐よ連れられ陣營へまかり出でる且元案内して元親父子降参の旨を官上よおよびました殿下　殿「ヤア珍らしや長曾我部父子の者其方ども敵對なすといへども先非を悔い元親こと入道となり降参のおもふき神妙の至り尤とも態〳〵　上使をつかはしたる磯揃兄弟が誠忠のなすところあり使者片桐をもって中しおくりたる通り土佐一ケ國永く領分たるべし孫太郎彌三郎儀は壯年のことなれば予よつかへ忠勤を勵むべし磯揃兄弟は重く取り立て得さすべし……兄弟の者是れへ兵庫之助内匠之助

前へ出でる殿下仰せよゝ　國「ヤヽ兵庫内匠爾等兄弟の賊忠よッて主家ゝ恙がないゞ勤私ゝ歳寒よ顧ゝれ貞心ゝ國危よ見ゝるど宜なるかな斯かる忠臣ゝ代の鑑とも相成るべし依ッて余より五百石づゝ両人へ與らするあり兄弟有り難なみだよくれました元親盛親信親の父子三人磯揃兄弟を見て　元「爾等が兵忠のおもふき迫ひ〳〵承たまゝり此れまで恨みし段今さら赤面のいたり忝じけなく思ふあり依て以後一族の列に加へ食祿加増すべし磯揃兄弟やうやく面を上げ　磯「それがし等が微忠を御稱美あッて御家門の列よ加へられ且つ御加増まで仰せくだされ候らふ段心魂よ徹し有りがたき仕合せよゞんじたてまつる殿下莞爾と笑ませられ　殿「然もあらん時よ元親父子鶴音丸ゝ其方どもへ相わたすあひだ宜きよ取り計らひ申すべしイザ主從の固めをさせんと此れより御盃を下され元親父子有りがたく頂戴し爰でお暇を賜

ゝッて元親盛親信親の三人よお引渡しよ相成ッたる鶴音丸ど國を守護なし磯揃兄弟を召し連れ高知へ歸城いたしました阿波の國岩倉山の城主受領山城守景信吉永良左衛門伴良太郎ゝ長曾我部元親へ下しおかるゝ爰で翌十一月五日高知本城よて大饗宴を張り殿下を始め諸將を饗應いたす其の翌六日ゝで滞留同七日の早天御陣拂ひ殿下高知を御發駕孫太郎彌三郎の両人御供よて京都へ登る尤ども直ちよお上りでゝなく是れより四國をあらまし御順覽あッて同十二月上旬京都へ御着に相成り夫より殿下よゝ御參内四國平均の次第を奏聞よおよぶ天皇叡感なゝめならず軍勢謝したまひ御廉間ぢかく召させられて天盃を下し賜れ是れより殿下よゝ大坂へ御歸城あッて此のたびの戰功の巳に依ッて夫れ〳〵へ恩賞の御沙汰あり一同万歳を唱へ威　朝日よ霜の消ゆるがごとくなり然れども殿下よゝ　殿「此の上ゝ猶は九州に

島津大友龍造寺關東より北條伊達等未だ余よ歸伏せざるものなり一日も早く是れ等を平定して四海安穩たらしめんとを仰せられ果して其の後ち島津を責め北條を討ち天下全たく御鎮となりました先ず四國征伐是れよりて結局とつかまつります。

明治卅二年十二月廿六日印刷
明治卅三年一月二日發行

東京市京橋區日吉町二番地
鬻演者 植柘正一郎

東京市日本橋區葺屋町一番地
發行者 瀧川民治郎

東京市日本橋區新和泉町一番地
今古堂活版所
印刷者 瀧川三代太郎

東京市日本橋區葺屋町壹番地
發行所 今古堂分店

不許複製

豐臣長曾我部

四國征伐 終

俳諧叢書目錄

- 芭蕉翁一代集　花の本撰
- 風俗文選　許六撰
- うづら衣　也有撰
- 一葉集　古學庵撰
- 本朝文鑑　渡部撰
- 寂寞　白雄撰
- 七部集大鏡　何丸撰
- 俳家奇人談　玄々一撰

(傑作小說)

- 胡砂吹く風　桃水著
- 短銃　桃水著
- 土屋源彌　桃水著
- 山本・曲助　孤林演
- 岩井松三郎　都新聞
- 電光一閃銘刀傳　一講演

今古堂書店發行書目

（東京市日本橋區葺屋町壹番地）

特殊の妙味と斬新なる趣考は書中に躍れり

- 探偵文庫 死人の掌 丸亭素人譯
- 探偵文庫 其四人 丸亭素人譯
- 探偵文庫 多湖廉平 丸亭素人譯
- 探偵文庫 生殺自在 丸亭素人譯
- 探偵文庫 獄中の働 丸亭素人譯
- 探偵文庫 三人探偵 丸亭素人譯
- 探偵文庫 鬼美人 菊亭笑庵譯
- 探偵文庫 林中の罪 菊亭笑庵譯
- 探偵小說 殺害事件 丸亭素人譯
- 探偵小說 慘毒 丸亭素譯
- 探偵小說 十萬株 不知火譯
- 徳川豊臣 小牧山合戰 松林伯知演
- 徳川田 味方ヶ原合戰 松林伯知演
- 武田上杉 川中島合戰 松林伯知演
- 武田徳川 長篠合戰 松林伯知演
- 浅井朝倉 姉川の合戰 松林伯知演
- 豊臣毛利 賤ヶ嶽合戰 松林伯知演
- 徳川豊臣 大阪冬御陣 松林伯知演
- 徳川豊臣 大阪夏御陣 松林伯知演
- 戍辰 上野合戰 桃川燕林演
- 豊臣島津 九州征伐 松林伯知演
- 南総 里見八犬傳 曲亭馬琴作

賣價の安直と製本の美は弊堂の特色なり

097533-000-2

特8-587

羽柴長曽我部四国征伐

松林　伯知／講演

M33

DBS-1445